

保護者支援の技術

公益社団法人 子どもの発達科学研究所
所長・主席研究員 和久田 学



保護者支援の技術

立場の違いを考える

保護者	職員
生まれたときから、将来まで	その1年、長くても数年
専門知識はない 子育ての経験も、今が真っ最中	それなりの知識、経験あり
子どもを個としてみる	他の子どもとの比較ができる
家庭環境(本人の慣れたところ)	施設環境(刺激多い)
いつも子どものことの責任を追及されたり、 指導をされたりする立場	『先生』としての立場あり (非常に微妙ではあるが…)
孤立しているかもしれない	施設という組織として
いろいろな保護者 (御本人が様々な状況を抱えている)	職員はある意味、セレクトされている

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

2

1

2

保護者支援の技術

保護者と連携する場合の留意点: トラウマインフォームドケア

- 保護者と敵対しないことが原則。
そのためには、時間をかけても回り道をして良い。(戦略的に)
- 保護者を絶対に責めない。
(一方で、虐待を疑ったら適切な対応をする→通告を含めて)
- 保護者を支援対象者とする。
責めるのではなく、支える。これまでの支援を労う。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

3

保護者支援の技術

事実の整理

[小学生の親]

我が子が、毎日、ずっと動き回って困る。私が見ているときはいつも。叱ると、たたいてくる。おもちゃを出したら出しっぱなし、テレビはつけっぱなし、服は脱ぎっぱなし。片づけるように言っても、全くやらない。でも、ゲームはずっとやっている。やめなさいと言うと怒りだす。お父さんの言うことは聞かぬが、夫(父親)は私が甘いと言う。私はこの子の将来が心配で夜も眠れない。夫(父親)は呑気で、子どもなんて、そんなもんだろ、と言う。私はとても疲れている。誰も自分の子育てを助けてくれないし、理解してくれない。自分の母親は遠くて頼れない。義母は文句を言うので、会うのもいや。子どもはもっとかわいいものだと思っていた。病院に行くのは絶対に違うと思う。しつけの問題だから。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

4

3

4

事実の整理

【中学生の親】

担任の先生が、よくない。指導力がないし、コミュニケーション能力もない。
我が子のことで相談にしたが、話を聞くだけで、何もしてくれない。
確かに、うちの子は難しい時期だと思う。小さいころは、いい子だった。
私の言うことをよく聞いて、お手伝いや宿題を進んでやった。
でも、今年度に入ってからおかしくなった。
私の言うことに、口ごたえをする。うるさい、と言う。
先生は、中学生はそういう時期だから、と言うが、親子の会話が寂しい。
学校ではよくしゃべっている、と先生は言うが、学校の話を持ち出されても困る。
そろそろ進路のことが心配になってきた。
子どもは、かまわないでくれ、と言って自分の部屋にこもってしまう。
父親はあてにならない。どうしたらいいか。

事実を確認する

- 保護者の話(教師の話も)は、事実と感想、見立て、考えが混在する。
- 事実が何かを確認しないと、支援の成果も確認できない。(不満が続いてしまう)
- 保護者の話から、「事実」「事実かも知れないこと(確認が必要)」「事実ではないこと(感想、考えなど)」を分けて捉える。
- 事実を確認するときは、対象となっている行動を定義づけ、その様子(頻度、時間、場所、結果、周りの様子)をなるべく客観的に記録する。(数値重視で)
- 保護者が言う「事実ではないこと」にも意味がある。これは保護者の考え、思い、悩みを表しており、保護者の事実であるとも言える。
- 子どもの事実(課題、困り感)と保護者の事実(悩み、困り感)を別に扱い、それぞれ解決する。

子どもの事実を明らかにすると 支援方法が見つかる

- 問題ではなく、良いところ、うまくいっているところを見つけられるかもしれない。
→ 良いところを喜び、増やす。成功体験を提供する。希望を持てる。
- 問題が起こる原因(起こりやすい場面、きっかけなど)が見つかるかもしれない。
→ 問題の予防が可能かもしれない。別の行動に変えることが可能かもしれない。
- 問題の詳細が明らかになるかもしれない。
→ 例えば、パニックを3段階で評価し、パニックは減らないものの、その激しさが少しずつ改善するかもしれない。

事実が明らかになると・・・

- 子どもの事実(課題、困り感)、保護者の事実(悩み、困り感)が明らかになると、何をすればいいのかが、明確になる。
- 明確になれば、共有が可能になる。
- 個別の教育支援計画への反映、家族内(両親、祖父母、きょうだいなど)でも共有が可能にある。

事実を明らかにすること = 可視化、見える化

相談内容の可視化



問題が整理され、解決策が示されることも

相談内容の可視化

【分析してわかること】

- 問題は時間と空間が重なるところに起きやすい。
(兄弟がリビングでテレビを見たいとき。父と子どもが暇になるとき)
- 母が忙しい時間に起きやすい。(食事の支度と片づけ)
- 子どもが暇な時間(活動がない時)に起きやすい。

【分析してわかること】

夫婦、家族、本人と話し合いをして
問題と目標を共有

解決へのアイデアとして
時間をずらす 場所をずらす
活動を作る(バリエーションを増やす)
場所を作る 活動を整理する
場所を整理する

9

10

相談内容の可視化

成功例

- 本人が落ち着いていられる場所を整備することで、家庭内の**安全基地**が決まり、行動が落ち着いた。
- 父親の帰宅が大きな**刺激**になっていた。
父親に「**帰るコール(メール)**」をしてもらうことで、改善した。
- 帰宅してからの流れを**パターン化**した。また「**活動選択**」するシステムを入れた。
中には御褒美がもらえる「**お仕事(お手伝い)**」を用意した。
空白の時間が減ったことで、問題行動が激減した。

物の整備、安全の確保など、様々なアイデアがある。

まとめ

- 保護者の常識は支援者の常識とは違う。
- **トラウマインフォームドケア**が基本。
- 保護者も支援対象である可能性がある。
- まず保護者の言葉を、「**事実**」「**事実かもしれないこと**」「**事実ではないこと**」で整理する。
- 子どもの**事実**、保護者の**事実**を明らかにしないと始まらない。
- 課題を可視化することにより、共有したり操作したりする。
- 保護者支援と子ども支援は両輪。支援技術を高めていく必要がある。

11

12

公益社団法人
子どもの発達科学研究所